

上代日本語の動詞接続「トリー」について

—複合動詞の存否を中心に—

阿部 裕 (名古屋大学大学院)

要 旨

上代日本語に「複合動詞」が存在するののかについては、未だに定説を見ない。本稿では、上代日本語に多数出現する動詞接続「トリー」について取り上げ、複合動詞の存否を中心に考察する。

上代日本語の動詞「トル(取る)」が単独で使用される場合には、《常に目的語を伴う》《「手に」などの二格を伴うことは少ない》という特徴を有する。また、「トル」は《自分の領域の外にあるものを(主として、手で掴むことによって)自分の領域の中に引き入れる》動作を表すと考えられる。これらの特徴を踏まえて上代日本語の動詞接続「トリー」を調査したところ、目的語の存在しない「トリー」、二格を顕著に伴いやすい「トリー」、「トル」と「持つ」両方の特徴が保存されていない「トリ持つ」を確認することができた。この中には、前項「トリ」が接頭辞的である「トリー」も存在する。このような、前項「トリ」が動詞「トル」の機能を有していない「トリー」は、複合動詞であると考えられる。

1. 問題の所在

日本語には、二つの動詞が連続した形式が多数見られる。本稿では、このような「動詞連用形+動詞」の形式を「動詞接続」と呼ぶ¹。動詞接続には、前部要素(以下、前項)と後部要素(以下、後項)が一体化せず二つの動詞として機能しているものと、前項と後項が一体化して機能しているものがある。前者はしばしば「動詞接続」と呼ばれるが、本稿では「動詞連用形+動詞」の総称として「動詞接続」という用語を用いるため、前者を「非一体化動詞接続」と呼ぶ。後者は一般的に「複合動詞」と呼ばれるため、それに従う。(a)は非一体化動詞接続、(b)は複合動詞の作例である。

- (a) 一日中、将来のことを思い過ぎした。
(b) 太郎が、次郎と花子の仲を取り持った。

(a)の「思い過ぎ」は、全体で一つの動詞として機能しているのではなく、「(将来のことを)思う」「(一日を)過ごす」という二つの動詞として機能しており、前項と後項は一体化していないとされる。これは、前項「思い」と後項「過ごす」の間にポーズを置くことができること、「思って過ぎた」のように「て」を挿入しても意味がほとんど変わらないこと、「つつ」や「ながら」を挿入できることなどから確認できる。一方、(b)の「取り持つ」は、「取る」「持つ」という二つの動詞としてではなく、「仲介する」という意味の一つの動詞として機能して

¹ 「動詞接続」という用語に関しては、百留康晴氏が百留(2003ほか)で同様の用語を用いているが、百留氏と本稿ではその定義が異なる。百留氏の用いる「動詞接続」は本稿のいう「非一体化動詞接続」にほぼ対応するものであり、「動詞連用形+動詞」のうち「語になり切っていないもの」を特に「動詞接続」と呼んでいる。つまり、百留氏のいう「動詞接続」には前項と後項が一体化した「複合動詞」は含まれない。これに対し、本稿が用いる「動詞接続」は「動詞連用形+動詞」形態の総称であり、「非一体化動詞接続」も「複合動詞」もすべて含むものである。

いる。前項「取り」と後項「持つ」の間にポーズや「て」を挿入すると「仲介する」という意味を表さなくなることから、一体化していることが分かる。このように、全体で一つの動詞として機能している動詞接続を、前項と後項が一体化した複合動詞であると²する。

動詞接続は上代日本語（以下、上代語）から現代日本語（以下、現代語）に至るまで連綿と存在する。現代語の動詞接続はほとんどが複合動詞であり、非一体化動詞接続は稀と思われる。これに対し、上代語における動詞接続の状況、中でも複合動詞の存否については諸説あり、未だに定説を見ていない。古くは金田一春彦（1953）、吉澤典男（1952）によって、古代日本語には複合動詞が存在しないとする説が唱えられた。その根拠についての詳細は割愛するが、この説は長らく主流となっており、近年でも百留（2001ab、2003）らがこの立場にある。この説に従えば、上代語の動詞接続はすべて、単なる動詞の連続あるいは羅列に過ぎない非一体化動詞接続となる。しかし、一部には上代語における複合動詞の存在を認める説もあり、近年では徳本文（2009）がこの立場である³。また、同年には山王丸有紀（2009）が上代語の複合動詞について論じているが、上代語における複合動詞の存在を積極的に認めておらず、徳本（2009）の結論との間にズレが認められる。同時期に、上代語における複合動詞の存否に関して結論の異なる二つの論文が提出されていることは、この問題について未だ考察の余地が残されていることを示唆している⁴。

一方、上代語に存在する「トリ向く」「ウチ靡く」などの動詞接続前項「トリ」「ウチ」は、辞書や注釈書において従来からしばしば「接頭辞」（接頭語）⁵として扱われる。一例を挙げれば、『時代別国語大辞典 上代編』の【とる〔取・執・捕〕】項には「接頭語的に用いられることもある」とあり、また【うち〔打〕】は同辞典で独立した項目として挙げられ、「接頭語。複合動詞前項としての打ツの連用形が固定したもの」と説明されている。接頭辞的な前項を有する動詞接続は広義の複合動詞（厳密には「派生動詞」とされる場合がある⁶）であるから、「トリ」「ウチ」を接頭辞と認めるのであれば、それは同時に上代語における複合動詞の存在をも認めるということになる。これは、長らく主流であった《古代語には複合動詞が存在しない》という説と矛盾する。そして、「トリ」「ウチ」といった動詞連用形が上代において接頭辞的に使用されたことを否定する説は、筆者の知る限りでは提出されていない。

このように、上代語における複合動詞の存否に関しては、相反する説が混在しているのが現状である。この原因の一つとして、いわゆる接頭辞的な前項を有するとされる動詞接続をどのように扱うのが不明確であることが挙げられるだろう。従来の上代語複合動詞研究では、上記の如き接頭辞的な前項を有するとされる動詞接続についてはほとんど触れられてこなかったのである。そこで本稿では、接頭辞的な前項を有する場合があるとされる上代語の動詞接続「トリ

² 複合動詞には様々なレベルのものが認められる。影山太郎（1993）、石井正彦（2007）など参照。

³ 徳本（2009）は、上代語における複合動詞を認める数少ない論の一つである。その論拠の一つとして、「動詞連用形+動詞」に「接頭辞的用法」の前項あるいは「補助動詞的用法」の後項を有するものが認められること、前項と後項がともに本来の意味を失っている「転義」の「動詞連用形+動詞」が認められることを挙げている。これは重要な指摘であるが、これらを「接頭辞的」「補助動詞的」「転義」として扱う根拠については述べられていない。

⁴ ここに挙げた研究以外にも、複合動詞の存否については数多くの考察がある。金田一（1953）に対するこまつひでお（1975）、関一雄（1977）の批判はその一例である。

⁵ 「接頭辞」「接頭語」は、動詞接続前項要素に対してはどちらもほぼ同じ意味で使用される。本稿では引用の場合などを除き「接頭辞」で統一する。

⁶ 村木新次郎（1991）ほか。

一) (以下、「トリ+動詞」の形式をこのように表記する) について取り上げ、前項「トリ」の接頭辞化は認められるのか、複合動詞は存在するのかといった問題について検討する。

2. 動詞「トル」の特徴

動詞連接「トリー」について考察する前提として、上代語の動詞「トル」の特徴を確認する。『万葉集』を資料として、全 97 例の「トル」を得た⁷。「トル」の表記は「取」「採」「獲」「執」「漁取」「等良」「刀良」「等理」「等里」「登流」「等流」であった。

2.1 「トル」の項構造

『万葉集』中の「トル」を観察した結果、「トル」はほぼすべての用例において目的語(動作対象)となりうる名詞を伴っていた。目的語が明示されない例⁸も僅かにあるが、そのような用例であっても先行文脈から「トル」の動作対象が何であるかは容易に判断できる。このことから、「トル」が他動詞であることは疑いがない。以下に用例の一部を挙げる。

- (1) 霰降り吉志美が岳を険しみと草トリかなわ(草取可奈和) 妹が手をトル(妹手乎取)
(『万葉集』巻3 〇三八五)
- (2) 千万の軍なりとも言挙げせずトリて来ぬべき(取而可来) 男とぞ思ふ
(『万葉集』巻6 〇九七二 高橋虫麻呂)
- (3) 瘦す瘦すも生けらばあらむをはたやはた鰻をトルと(武奈伎乎漁取跡) 川に流るな
(『万葉集』巻16 三八五四 大伴家持)
- (4) 珠洲の海人の 沖つ御神に い渡りて 潜きトルといふ(可都伎等流登伊布) 腹玉 五百箇
もがも…
(『万葉集』巻18 四一〇一 大伴家持)
- (5) 父母え齋ひて待たね筑紫なる水漬く白玉トリて来までに(等里久弓麻弓)
(『万葉集』巻20 四三三〇 川原虫麻呂)

また、「トル」には目的語だけでなく二格を伴う用例も存在する。「トル」に伴う二格には、「手に」「沖辺に」のように動作の位置や場所を表すもの、「網取りに」「我妹子に見せむがために」のように動作の状態や目的を表すものがある。しかし、これらを合わせても二格を伴うものは97例中の11例に過ぎず、「トル」が二格を伴うことは決して多くはない。なお、このうちで最多のものは「手に」(「大御手に」を含む)であり、11例中の5例である⁹。

⁷ 調査に当たっては、『万葉集索引』(塙書房)、『万葉集總索引 単語篇』(平凡社)を利用した。本文は鶴久・森山隆編『万葉集』(おうふう)を使用し、上記索引との間に訓読の異同が認められる場合には、『万葉集』(おうふう)の訓読を優先した。なお、表記は適宜漢字仮名混じり文に改めた。

また、「トル」には単独で動詞として使用されるもののほか、動詞に前接するもの(動詞連接「トリー」)や動詞に後接するものがあるが、「トリー」は3節で取り上げるためここでは除外し、動詞に後接するものは調査対象に含めた。「トリ」から派生したと考えられる「トラフ(捕ふ)」や、「トル」を含む地名「取石池」、いわゆる枕詞である「鯨魚トリ」もすべて対象とした。

⁸ 冬こもり 春さり来れば 鳴かずありし 鳥も来鳴きぬ 咲かずありし 花も咲けれど 山をしみ 入りても トラず(入而毛不取) 草深み トリても見ず(執手母不見)…(『万葉集』巻1 〇〇一六 額田王)がこの一つの例である。ここでは、先行文脈に出現する「鳥」や「草」が動作対象となっている。

⁹ この他、「沖辺に」「脛裳に」「袴帯に」「網取りに」「我妹子に見せむがために」「画に(描きトル)」が各1例。

- (6) 目には見て手にはトラえぬ (手二被不所取) 月の内の楓のごとき妹をいかにせむ
 (『万葉集』巻4 〇六三二 湯原王)
- (7) 初春の初子の今日の玉筥手にトルからに (手尔等流可良尔) ゆらく玉の緒
 (『万葉集』巻20 四四九三 大伴家持)
- (8) 御食向ふ 淡路の島に 直向ふ 敏馬の浦の 沖辺には 深海松トル(深海松採) 浦廻には な
 のりそれる 深海松の 見まく欲しけど なのりその おのが名惜しみ 間使も 遣らずて我
 れは 生けりともなし
 (『万葉集』巻6 〇九四六 山部赤人)
- (9) 霍公鳥聞けども飽かず網取りに (網取尔) トリてなつけな (獲而奈都氣奈) 離れず鳴く
 がね
 (『万葉集』巻19 四一八二)
- (10) このしぐれいたくな降りそ我妹子に見せむがために黄葉トリてむ (母美知等里底牟)
 (『万葉集』巻19 四二二二 久米広綱)

以上、『万葉集』における動詞「トル」は常に目的語(動作対象)を伴う他動詞であること、二格を伴う場合もあるがそのような例は少ないことを確認した。

2.2 「トル」の意味

『万葉集』中の他動詞「トル」が表す意味は、「掴む」「持つ」のように解釈される単純な《何かを手にする動作》(42例)、「捕まえる」「漁をする」のように解釈される《捕獲する動作》(22例)、「拾う」「採る」のように解釈される《採取する動作》(29例)、《奪う動作》(1例)、「討ち取る」「殺す」のように解釈される《平定する動作》(1例)に大別できるが、これらはいずれも連続的であり、厳密に区別できるものではない。また、訓読が定まっておらず解釈困難な動作も2例(一首中に出現)存在する。それぞれの一例を挙げる。

《何かを手にする動作》(42例)

- (11) 霰降り吉志美が岳を険しみと草トリかなわ (草取可奈和) 妹が手をトル (妹手乎取)
 (『万葉集』巻3 〇三八五) ((1) 再掲)

《捕獲する動作》(22例)

- (12) 瘦す瘦すも生けらばあらむをはたやはた鰻をトルと (武奈伎乎漁取跡) 川に流るな
 (『万葉集』巻16 三八五四 大伴家持) ((3) 再掲)

《採取する動作》(29例)

- (13) 雄神川紅にほふ娘子らし葦付^{木松之類}トルと (葦附^{木松之類}等流登) 瀬に立たすらし
 (『万葉集』巻17 四〇二一 大伴家持)

《奪う動作》(1例)

- (14) み幣取り三輪の祝が畜ふ杉原薪伐りほとほとしくに手斧トラえぬ (手斧所取奴)
 (『万葉集』巻7 一四〇三)

《平定する動作》(1例)

- (15) 千万の軍なりとも言挙げせずトリて来ぬべき (取而可来) 男と思ふ
 (『万葉集』巻6 〇九七二 高橋虫麻呂) ((2) 再掲)

《解釈困難な動作》

- (16) …日ざらしの麻手作りを 信巾裳なす 脛裳にトラせ (者之寸丹取為) …水縹の綱の帯

を引き帯なす 韓帯にトラセ（韓帯丹取為）…（『万葉集』巻16 三七九一）¹⁰

いずれも、具体的な目的語を有する動作である。それぞれに相違はあるが、いずれも「自分の領域の外にあるものを（主として、手で掴むことによって）自分の領域の中に引き入れる」という共通性があると考えられるので、これを他動詞「トル」の基本的な意味と捉えておく。

3. 動詞接続「トリー」の特徴

本稿では、他動詞「トル」の連用形「トリ」と動詞が連続し、「トリ+動詞」の形となるものをすべて動詞接続「トリー」として扱う。「トリ」と後項動詞が一体化しているかについては、この段階では考慮しない。その結果、『万葉集』からは91例の「トリー」が得られた¹¹。前項「トリ」の表記は「取」「採」「執」「等利」「刀利」「登利」「登里」「等里」「登理」「等理」「刀里」であり、動詞「トル」の場合と大きな違いはない。

3.1 「トリー」の用例

「トリ」は自動詞、他動詞のどちらにも接続する。91例のうち、自動詞に接続するものが9例、他動詞に接続するものが82例であり、他動詞に接続するものが圧倒的である。用例と用例数（()内の数字）を以下に示す。

【トリ+自動詞】

トリ付く（四段）(3)・トリ来(2)・トリ続く(2)・トリとどこほる(1)・トリよろふ(1)

【トリ+他動詞】

トリ持つ(28)・トリ佩く(8)・トリ見る(6)・トリ負ふ(4)・トリ懸く(4)・トリ替ふ(3)・トリ着る(3)・トリ付く(下二段)(3)・トリ与ふ(2)¹²・トリ置く(2)・トリ垂づ(2)・トリ添ふ(2)・トリ向く(2)・トリ装ふ(2)・トリ上ぐ(1)・行きトリ探る(1)¹³・トリ敷く(1)・トリ束ぬ(1)・トリ尽す(1)・トリつづしろふ(1)・トリ撫づ(1)・トリ靡く(1)・トリ並め懸く(1)・トリ離す(1)・トリ食す(1)

3.2 「トリー」の分類

『万葉集』中の「トリー」には、目的語を有するものと有さないもの、また格助詞「ニ」を伴うものと伴わないものが存在する。本稿では、後項動詞の自他と項構造（目的語とニ格の有無）に注目して、「トリー」を次の5種類に分ける。

¹⁰ この部分のみ、訓読を『万葉集』（おうふう）ではなく伊藤博『万葉集釋注』に拠った（ただし、一部の表記を改めた）。（16）は雑歌であり、『萬葉集』（おうふう）では訓読がなされていないためである。

¹¹ 用例の探索は「トル」の場合と同様『萬葉集索引』、『萬葉集總索引 單語篇』に拠り、本文は『萬葉集』（おうふう）に従った。また、調査対象には地名「取替川」を含めた。

¹² 「取委」（巻2 ○二一三）は「トリアタフ」ではなく「トリマカス」と訓読される場合もある。

¹³ 「トリ探る」は「泣く子なす 行きトリ探り（行取左具利） 梓弓 弓腹降り起こし」という文脈である。この部分を「取」を目的語として「取トリ探り」と解釈する説もあるが、文脈に合わないため、本稿では「行きトリ探り」と解釈する。

- ①「トリ」＋自動詞で目的語を伴うもの（2例）
- ②「トリ」＋自動詞で目的語を伴わないもの（7例）
- ③「トリ」＋他動詞で目的語と二格を伴うもの（42例）
- ④「トリ」＋他動詞で目的語のみを伴うもの（32例）
- ⑤「トリ」＋他動詞で目的語を伴わないもの（8例）

以下、①～⑤のそれぞれの形式について、用例を挙げつつ確認していく。また、前項の接頭辞化、複合動詞の存否との関連についても触れる。

3.3 ①「トリ」＋自動詞で目的語を伴うもの

後項が自動詞であり、かつ目的語を伴う「トリー」は「トリ来」の2例のみであった。

- (17) 天橋も 長くもがも 高山も 高くもがも 月夜見の 持てる をち水 いトリ来て (伊取来而)
君に奉りて をち得てしかも (『万葉集』巻13 三二四五)
- (18) 虎に乗り 古屋を越えて 青淵に 蛟竜 トリ来む (蛟龍取将来) 剣大刀もが
(『万葉集』巻16 三八三三 境部王)

「をち水」「蛟竜」は「トリ来」の前に位置し、目的語となっている。また、後項「来」は自動詞であり、目的語を有するとは考えられない。この二つの理由から、「をち水」「蛟竜」は前項「トリ」の目的語であると判断できる。目的語を伴うという特徴は、既に見た動詞「トル」の特徴と合致する。ここにおける「トリ」は「(をち水を) 手に入れる」「(蛟竜を) 捕まえる」という具体的な対象を有する動作を表していると考えられ、意味的にも動詞「トル」が単独で使用される場合と相違ない。したがって、これら2例の「トリ来」の前項「トリ」は、他動詞としての機能を保持しているといえる。

前項「トリ」が他動詞としての機能を保持しているのであるから、これらの「トリ来」を前項と後項が一体化した複合動詞であると積極的に考える理由は存在しない。前項あるいは後項の動詞としての機能が失われていることを示す現象が観察されれば一体化の根拠を得たことになるが、前項と後項がともに機能を保持しているこの種の「トリー」は、非一体化動詞連接の可能性が高い。

3.4 ②「トリ」＋自動詞で目的語を伴わないもの

後項が自動詞であり、かつ目的語を伴わない「トリー」は7例存在する。「トリよろふ」「トリ付く(四段)」「トリ続く」「トリとどこほる」である。

このうち、「トリよろふ」は解釈の困難な例が1例¹⁴存在するのみであるため、ここでは「トリ付く」「トリ続く」「トリとどこほる」に注目する。

- (19) 大君の命畏み出で来れば我の トリ付きて (和努等里都伎豆) 言ひし子なはも
(『万葉集』巻20 四三五八 物部龍 防人歌)

¹⁴ 大和には 群山あれど トリよろふ (取與呂布) 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立つ 立つ 海原は 鷗立つ立つ うまし国ぞ 蜻蛉島 大和の国は (『万葉集』巻1 〇〇〇二 舒明天皇)

- (20) …若草の 妻はトリ付き (都麻波等里都吉) 平らけく 我れは斎はむ…
 (『万葉集』巻20 四三九八 大伴家持)
- (21) 唐衣裾にトリ付き (須宗尔等里都伎) 泣く子らを置いてぞ来のや母なしにして
 (『万葉集』巻20 四四〇一 他田舎人大嶋 防人歌)
- (22) 世の中の すべなきものは 年月は 流るるごとし トリ続き (等利都々伎) 追ひ来るも
 のは… (『万葉集』巻5 〇八〇四 山上憶良)
- (23) …茅渟壮士 その夜夢に見 トリ続き (取次寸) 追ひ行きければ…
 (『万葉集』巻9 一八〇九 高橋虫麻呂歌集)
- (24) 衣手にトリとどこほり (取等騰己保里) 泣く子にもまされるわれを置いていかにせむ
 (『万葉集』巻4 〇四九二 舎人吉年)

これらの「トリー」には目的語が存在しない。「我の」「我に」の詠りとされる)、「裾に」、「衣手に」といったニ格を伴う例はあるものの、目的語は伴っていない。2.1 節で見たように「トル」は常に目的語を伴う他動詞であるから、これらの「トリ付く」「トリ続く」「トリとどこほる」の前項「トリ」が、自立した動詞として機能しているとは考えにくい。いずれも、目的語を伴わず「トリー」全体で自動詞のように使用されている。

後項となる「付く」「続く」「とどこほる」のうち、「付く」「とどこほる」は、用例は少ないながらも単独で自動詞として使用される。また、「付く」にはニ格を伴う用例がある。

- (25) 衣手に水澁付くまで (水澁付左右) 植ゑし田を引板我が延へまもれる苦し
 (『万葉集』巻8 一六三四)
- (26) 旅とへど真旅になりぬ家の妹が着せし衣に垢付きにかり (阿加都积尔迦理)
 (『万葉集』巻20 四三八八 占部虫麻呂 防人歌)
- (27) …群鳥の 出で立ちかてに とどこほり (等騰己保里) かへり見しつつ いや遠に 国を
 来離れ… (『万葉集』巻20 四三九八 大伴家持)

このことから、「トリ付く」「トリとどこほる」は、前項「トリ」の項構造が保存されておらず、後項「付く」「とどこほる」の項構造に合致していることが分かる。「トリ付く」「トリとどこほる」の機能の中心は後項動詞にあり、前項「トリ」は単独使用時のような動詞としての機能を有していないといえる。このような「トリ」は、後項と一体化していなければ機能できない。よって、前項が動詞として機能していない「トリ付く」「トリとどこほる」は、非一体化動詞接続ではなく、複合動詞と考えるべきものである。

なお、『万葉集』中には動詞「続く」の単独の確例が存在しないため、単独使用の「続く」と「トリ続く」の項構造を比較することはできない。しかし、構造的に「トリ付く」「トリつづしろふ」に類似しており、「トリ続く」も複合動詞である可能性が高いと思われる。

3.5 ③「トリ」+他動詞で目的語とニ格を伴うもの

「トリー」には目的語とニ格の両方を伴うものが多く、『万葉集』中の「トリー」91例のうち42例である。「トリー」に伴うニ格には「手に(トリ持つ)」「腰に(トリ佩く)」「海中に(トリ向く)」のように動作の直接的な位置や場所を示すものや、「春の日に(トリ持つ)」「乞ひ泣

くごとに(トリ与ふ)」のように動作と直接的な関係のない時間や動作の契機を示すものがある。ここでは、前者に注目して考察する。

動作の直接的な位置や方向を示す二格を伴う「トリー」は『万葉集』中に36例確認できる。この形式で最多のものは「手にトリ持つ」の16例である。「トリ持つ」という動詞連接は『万葉集』中に28例存在するが、そのうち16例が「手に」を伴って使用される。

- (28) 木綿置手にトリ持ちて(手取持而)かくだにも我れは祈ひなむ君に逢はじかも
(『万葉集』巻3 〇三八〇 坂上郎女)
- (29) まそ鏡手にトリ持ちて(手取持手)朝な朝な見む時さへや恋の繁けむ
(『万葉集』巻11 二六三三)
- (30) 手束弓手にトリ持ちて(手尔取持而)朝狩りに君は立たしぬ棚倉の野に
(『万葉集』巻19 四二五七)

2.1節で見たように他動詞「トル」も「手に」を伴うことがあるが、その数は97例中5例に過ぎず、決して多いものではなかった。それに対し、動詞連接「トリ持つ」は半数以上が「手に」を伴っており、傾向の差は顕著である。このような明らかな差が見られることは、動詞連接「トリ持つ」が単に「トル」と「持つ」が連続しただけの非一体化動詞連接ではないことを示唆している。前項「トリ」が単独使用時と同じ動詞として機能しているのであれば、「手に」を伴うことが少なくなければならないからである。なお、『万葉集』における単独の他動詞「持つ」が「手に」を伴う用例は1例のみ¹⁵であり、「手に」を伴いやすいという特徴は「持つ」とも合致しない。この特徴は、動詞連接「トリ持つ」になって初めて備わったものといえる。

「トリ持つ」の他、「トリ佩く」も目的語と二格を伴いやすく、全8例のうち6例が二格(「腰に」「大御身に」)を伴う¹⁶。

- (31) …大御身に 大刀トリ佩かし(大刀取帶之)大御手に弓トリ持たし御軍士を率ひたまひ整ふる鼓の音は…
(『万葉集』巻2 〇一九九 柿本人麻呂)
- (32) …ますらをの心振り起し 劔太刀 腰にトリ佩き(腰尔取佩)梓弓 収トリ負ひて天地といや遠長に万代にかくしもがもと…
(『万葉集』巻3 〇四七八 大伴家持)
- (33) 枕太刀 腰にトリ佩き(己志尔等里波伎)ま愛しき背ろが罷き来む月の知らなく
(『万葉集』巻20 四四一三 大伴部真足女 防人歌)

『万葉集』を調査したところ、「佩く」の単独使用の例そのものも少ない¹⁷のであるが、「佩く」が「トリ佩く」の形以外で二格をとる用例は「劔太刀身に佩き添ふる(身尔佩副流)」(『万葉

¹⁵ 「手に持てる(手尔持流) 我が子飛ばしつ 世の中の道」(『万葉集』巻5 〇九〇四)。また、「手に」の他「(君を)心に持つ」という表現もある。

¹⁶ 「取帯之」(『万葉集』巻2 〇一九九)は「トリオバシ」と訓読される場合があるが、ここでは『万葉集』(おうふう)に従い「トリハカシ」と読む。

¹⁷ 「佩く」には四段活用のもと下二段活用のものがある。前者の「佩く」は4例、後者は2例である。他に、「トリ佩く」以外では「かけ佩く」「さし佩く」「佩き添ふ」(本文中に挙げたもの)「佩けり」「み佩かしを」「むかばき」が各1例見られる。「佩き添ふ」の他、「牛にこそ鼻繩はくれ」という下二段の用例が二格を伴うが、下二段活用であることから除外した。なお、用例の採集は『万葉集索引』によった。

集』巻11 二六三五)のみであった。用例は少ないものの、「トリ佩く」形以外の「佩く」が二格を伴うことは少なく、「トリ佩く」となる場合に二格をとりやすいと言えそうである。「トリ佩く」が「腰に」などの二格を伴いやすいとすれば、「トリ持つ」が「手に」を伴いやすいことと類似した特徴を有するということであり、注目すべきであろう。

この他、「トリ懸く」「トリ添ふ」「トリ向く」「トリ付く」「トリ垂づ」も、同様に二格を伴う場合がある。

- (34) 大船の 思ひ頼みて さな葛 いや遠長く 我が思へる 君によりては 言の故も なくあり
こそと 木綿たすき 肩に トリ懸け (肩荷取懸) 斎瓮を 斎ひ掘り 掘ゑ 天地の 神にぞ我が
が禱む いたもすべなみ (『万葉集』巻13 三二八八)
- (35) …ちはやぶる 神の社に 照る鏡 倭文に トリ添へ (之都尔等里蘇倍) 祈ひ禱みて 我が
待つ時に… (『万葉集』巻17 四〇一一 大伴家持)
- (36) 在り嶺よし 対馬の 渡り 海中に 幣 トリ向けて (幣取向而) 早帰り来ね
(『万葉集』巻1 〇〇六二 春日藏首老)
- (37) …矢形尾の 我が大黒に 大黒者 蒼鷹之名也 白塗の 鈴 トリ付けて (鈴登里都氣弓) 朝猟に 五
百つ鳥立て… (『万葉集』巻17 四〇一一 大伴家持)
- (38) …竹玉を 繁に貫き垂れ 斎瓮に 木綿 トリ垂でて (木綿取四手而) 斎ひつつ 我が思ふ
我子 ま幸くありこそ (『万葉集』巻9 一七九〇)

以上をまとめると、目的語と二格を伴う「トリー」には「手にトリ持つ」「腰にトリ佩く」「肩にトリ懸く」「倭文にトリ添ふ」などがあり、中でも「トリ持つ」「トリ佩く」は顕著に二格を伴いやすいといえる。他動詞「トル」が二格を伴うことが非常に少なかったことを考慮すると、これらの「トリー」は単なる非一体化動詞連接とは考えにくい。「トリ」と後項が一体化した複合動詞と考えるべきであろう。また、手に関する動作を表す「トル」が「腰に」「肩に」といった二格を伴い「腰にトル」「肩にトル」などの表現を形成するとは考えにくい。一方、例えば「佩く」は「腰から下の身体に物を装着する」意を表す他動詞と考えられており、単独で二格を伴う用例は少ないながらも、その機能からは「腰に佩く」という表現を十分に想定しうる動詞である。「懸く」も同様に「肩に懸く」という表現を意味的に十分に想定できる。これらの理由から、「腰にトリ佩く」「肩にトリ懸く」の二格は、「トリ」を飛び越えて「佩く」「懸く」と格関係にあると考えられる。このことから、「トリ佩く」「トリ懸く」の前項「トリ」が自立した動詞として機能している可能性は低いと判断できる。

最後に、動作と直接的な関係のない時間や動作の契機を示す二格を伴う「トリー」の用例を挙げておく。

- (39) やすみしし 我が大君の 朝には トリ撫でたまひ (取撫賜) 夕には い寄り立たしし み
執らしの 梓の弓の 中弭の 音すなり… (『万葉集』巻1 〇〇〇三 舒明天皇)
- (40) …我妹子が 形見に置ける みどり子の 乞ひ泣くごとに トリ与ふ (取與) 物しなけれ
ば… (『万葉集』巻2 〇二一〇 柿本人麻呂)
- (41) …韓国の 虎といふ神を 生け捕りに 八つトリ持ち来 (八頭取持来) …
(『万葉集』巻16 三八八五)

これらが複合動詞であるか非一体化動詞接続であるかは、現時点では判断を保留する。

3.6 ④「トリ」＋他動詞で目的語のみを伴うもの

④の「トリー」は32例である。用例数では③に及ばないが、多様な「トリー」が含まれる。

④には、(42)「トリ持つ」(43)「トリ佩く」(44)「トリ懸く」など、③で注目した目的語と二格を伴う「トリー」と同様の「トリー」が散見されるほか、(44)(45)のように同じく③で注目した二格を伴う「トリー」と連続して用いられる用例がある。このことから、③と④の「トリー」には何らかの関連があると思われる。

- (42) なでしこが花トリ持ちて (波奈等里母知豆) うつらうつら見まくの欲しき君にもあるかも
(『万葉集』巻20 四四四九 船王)
- (43) …もころ男に 負けてはあらじと 懸け佩きの 小太刀トリ佩き (小劔取佩) ところづら
尋め行きければ… (『万葉集』巻9 一八〇九 高橋虫麻呂歌集)
- (44) ひさかたの 天の原より 生れ来る 神の命 奥山の 賢木の枝に…しらか付け 木綿トリ付
けて 斎瓮を 斎ひ掘り 掘ゑ 竹玉を 繁に貫き垂れ 獣じもの 膝折り伏して たわや女の
褰トリ懸け (押日取懸) かくだにも 我れは折ひなむ 君に逢はじかも
(『万葉集』巻3 〇三七九 坂上郎女)
- (45) …ますらをの 心振り起し 劔太刀 腰にトリ佩き 梓弓 鞆トリ負ひて (鞆取負而) 天地
といや遠長に 万代に かくしもがもと 頼めりし 皇子の御門の…
(『万葉集』巻3 〇四七八 大伴家持)

ただし、これらの「トリー」は前項と後項がともに他動詞であり、また③で大きな特徴となった二格も存在しないため、前項「トリ」が本来の他動詞「トル」の機能を有しているのかを明示するのは困難である。したがって、おそらく④の「トリー」にも複合動詞が含まれるのではないかと考えられるが、断定はできない。

③との関連が見受けられない④の「トリー」については、一部の用例を挙げるにとどめる。これらについても、複合動詞の可能性がある例は存在するものの、複合動詞か非一体化動詞接続かを明示するのは容易でない。本稿では保留としておきたい。

- (46) 風交じり 雨降る夜の 雨交じり 雪降る夜は すべもなく 寒くしあれば 堅塩を トリつ
づしろひ 糟湯酒 うちすするひて… (『万葉集』巻5 〇八九二 山上憶良)
- (47) 石上 布留の命は 手弱女の 感ひによりて 馬じもの 繩トリ付け (繩取附) 獣じもの 弓
矢困みて 大君の 命長み 天離る 鄙辺に罷る 古衣 真土の山ゆ 帰り来ぬかも
(『万葉集』巻6 一〇一九)
- (48) 劔大刀身に添ふ 殊を トリ見がね (等里見我祢) 音をぞ泣きつる手児にあらなくに
(『万葉集』巻14 三四八五 東歌)
- (49) 針袋トリ上げ前に置き (等利安宜麻敵尔於吉) 返さへばおのともおのや裏も継ぎたり
(『万葉集』巻18 四一二九 大伴池主)

3.7 ⑤「トリ」＋他動詞で目的語を伴わないもの

「トリ」＋他動詞で目的語を伴わない⑤の「トリー」は、『万葉集』に 8 例見られる。その中で特に注目したいのは、次に挙げる「トリ持つ」である。

- (50) 大君の 任きのまにまに トリ持ちて (等里毛知臣) 仕ふる国の 年の内の 事かたね持ち
玉梓の 道に出で立ち 岩根踏み 山越え野行き 都辺に 参りし我が背を…
(『万葉集』巻 18 四一一六 大伴家持)

この「トリ持つ」には目的語が存在しない。他動詞「トル」が常に目的語を伴うことは先に述べたが、他動詞「持つ」もまた、単独で使用される際にはほぼ例外なく目的語を有する。したがって、この「トリ持つ」は、動詞「トル」「持つ」のどちらの項構造にも合致しない。また、(50) の「トリ持つ」は「政事を行う」といった意味で使用されていると考えられ、「トル」や「持つ」が本来表す何かを手にする動作を表していない¹⁸。よって、項構造と意味の両面において「トリ」「持つ」どちらの特徴も確認できないといえる。

同様の意味での使用と思われる「トリ持つ」に、以下の 2 例がある。これらにはそれぞれ「食す国の事」「政事」という目的語が存在するが、その機能は上記「トリ持つ」にきわめて類似していると思われる。項構造による分類ではどちらも④となる。

- (51) あをによし 奈良を来離れ 天離る 鄙にはあれど 我が背子を見つつし居れば 思ひ遣る
こともありしを 大君の 命畏み 食す国の 事トリ持ちて (許等登理毛知臣) 若草の 足
結び手作り… (『万葉集』巻 17 四〇〇八 大伴池主)
- (52) 大昔^乃 政事^平 取以^天 奉^良 止^念 行^天 奈^毛 位^冠 賜^久 止^宣。
(『続日本紀』宣命第三十七詔 称徳天皇)

また、目的語の性質にも注目すべきである。「事」「政事」のような、誰かの所有物となり得ない、モノではない事柄を目的語とする用例は、「トル」「持つ」には見られない¹⁹。僅かに

- (53) 悪^久 奸^奴 乃^政 柄^執 天^執 (『続日本紀』宣命第二十八詔)

という一見「トル(執る)」が「政事を行う」意で使用されているように見える例が存在するが、ここは「悪くて心のねじれた奴が政治の根本を握っている」という文脈であり、本来は具体物である「柄」を比喩的に使用しているのだと考えられる。また、(50) には「事かたね持ち」の例があるが、「かたね持つ」は他に類例のない動詞接続であることから、「持つ」の単独例からは除外する。

目的語を有さない用例があること、目的語を有するものであっても具体的な物体でないこと

¹⁸ 『万葉集』における「持つ」は、大きく分けて 2 種類の用法がある。一つは、「所有する」「手にする」「心に抱く」など、現代語の「持つ」とほぼ同じ意味での用法であり、もう一つは、手段・道具などを表す現代語の「～で」「～をもって」に近い意味での用法である。動詞接続に含まれる「持つ」は全て前者と考えられる。項構造は、「トル」と同様にほぼ例外なく目的語を伴うが、二格をとることは少ない。

¹⁹ 「持つ」はしばしば「心」という具体物でないモノを目的語とするが、「心」は人の所有である点で、「事」「政事」とその性質を異にする。

から、「政事を行う」意で使用されている「トリ持つ」は、独自の特徴を有する複合動詞と見るのが妥当である。なお、このような前項後項の機能がともに失われた複合動詞は、徳本(2009)では「転義」、石井正彦(2007)では「熟合構造」とされる。「熟合構造」の「トリ持つ」は、複合動詞として成熟しているのではないかと思われるが、この問題については今後の考察が必要である。

⑤に含まれる他の7例については、ここでは一部の用例を挙げるに止めておく。複合動詞の可能性が高いと思われるものもあるが、現時点ではそれを明示するのは困難である。

(54) …道の隈廻に 草手折り 柴トリ敷きて 床じもの うち臥い伏して 思ひつつ 嘆き伏せらく 国にあらば 父トリ見まし(父刀利美麻之) 家にあらば 母トリ見まし(母刀利美麻志) 世間は かくのみならし 犬じもの 道に伏してや 命過ぎなむ

(『万葉集』巻5 ○八八六 山上憶良)

(55) 紅の深染めの衣下に着て上にトリ着ば(上取著者) 言なさむかも

(『万葉集』巻7 一三一三)

(56) 大君の 命畏み 妻別れ 悲しくはあれど 大夫の 心振り起し トリ装ひ(等里与曾比) 門出をすれば…

(『万葉集』巻20 四三九八 大伴家持)

4. 「トリー」に複合動詞は存在するか

他動詞「トル」と動詞接続「トリー」の特徴をまとめると、次のようになる。

- ・「トル」は常に目的語を伴う。また、「手に」などの二格を伴うこともあるが、97例中11例(うち5例が「手に」と少ない)。
- ・「トリー」には目的語を伴わないものがある。②や⑤の「トリー」がこれに当たる。②の「トリー」においては、前項ではなく後項が主要部として機能していると考えられる。
- ・「トリー」には二格を伴いやすいものがある。「トリ持つ」は28例中16例が「手に」を伴い、「トリ佩く」は8例中6例が「腰に」「大御身に」を伴う。全体では91例のうち42例が二格を伴い、そのうち36例が動作の直接的な場所や方向を指す二格を伴う。
- ・「トリ持つ」には、目的語が存在せず「政事を行う」という意味で使用されたものがある。これは前項「トル」とも後項「持つ」とも異なる特徴である。

動詞接続「トリー」の特徴と他動詞「トル」の特徴が一致しないことは、「トリー」が単なる非一体化動詞接続ではないことを示している。上代語の「トリー」には複合動詞と認められるものが含まれると考えられる。

複合動詞と判断できる根拠が確認できたのは、②・③・⑤の「トリー」である。②には前項「トリ」の目的語が存在せず全体が後項自動詞の項構造に一致する「トリー」、③には「手に」「腰に」といった二格を伴いやすいという、他動詞「トル」には見られない特徴を有する「トリー」、⑤には「トル」とも「持つ」とも異なる機能と考えられる「トリ持つ」が存在した。これらは、非一体化動詞接続では有り得ない。いずれも複合動詞と考えられる。これらのうち、②と③の「トリー」には、前項が接頭辞化している可能性が認められる。②の「トリー」は全体の項構造と意味が後項動詞に近似しており、おそらく前項「トリ」は後項動詞に多少の意味

変化を与えているだけの存在と考えられる。③については、「トリ佩く」を例として考えてみる。「トリ佩く」は「腰に」を伴って使用されることが多い。「トル」は手に関する動作であり、「腰にトル」という用例は確認できないこと、また「佩く」は腰から下の身体に物を装着する意味を表すと思われることから、「腰に」は「トリ」ではなく「佩く」にかかっている可能性が高い。これらの「トリ」は動詞としては機能せず「佩く」に付属しているのが妥当である。「接頭辞」は別の要素（語基）に前接しなければ機能できない要素であり、その機能は語基に形式的な意味を添えたり多少の意味変化を与えたりすることであるから、②や③の前項「トリ」は接頭辞に近い働きをしていると言ってよいだろう。ただし、このような要素を従来通り「接頭辞」と称してよいのかについては再考が必要だと考えられるため、本稿では「接頭辞的」としておく²⁰。

以上をまとめると、上代語の動詞連接「トリー」のうち②・③のものには接頭辞的な前項を有するものが存在し、そのような「トリー」は複合動詞といえる。また、⑤の「トリ持つ」のように、前項が接頭辞的でない複合動詞も存在する。

5. 今後の課題

動詞がどのようなプロセスによって接頭辞的な要素になるのかについて、明らかになっている部分はきわめて少ない。動詞の接尾辞化についての研究は散見されるが、接頭辞化についてはこれまでほとんど扱われてこなかったのである。動詞の接頭辞化に関する数少ない考察の一つに石井（2007）がある。石井（2007）は現代語の複合動詞について詳細に考察したものであり、[派生構造]の複合動詞（接辞的な要素を有する複合動詞）についても触れている。石井（2007）は[派生構造]を[過程結果構造]（「複合動詞の表すひとまとまりの運動を二つの局面に分割し、時間的に先行する[過程]の局面を前項が、それに後続する[結果]の局面を後項が表す構造」）の複合動詞が基底となって生じるものとした。[過程結果構造]は接辞的要素を含まない通常の複合動詞の構造である[複合構造]の一種とされるから、そこから[派生構造]が成立したとすれば、[派生構造]（派生動詞）の成立は[複合構造]（複合動詞）の存在を前提とするということになる。つまり、[過程結果構造]を有する複合動詞レベルの動詞連接が存在し、その前項が形式化することによって初めて接頭辞を前項とする派生動詞レベルの動詞連接が形成されるとするのである。これは、言語変化の流れに照らしても自然なプロセスであろう。これに関連して、筆者は接頭辞的な前項「トリ」は複合動詞「トリ持つ」から成立したという仮説を立てている。この仮説については、更なる検証が必要であるため、稿を改めて述べたい。なお、このプロセスが正しいものであるなら、前項が接頭辞的な「トリー」は「トリ持つ」が複合動詞化してからある程度長い期間を経て成立したものであり、複合動詞の古くからの存在を示すものとなる。

また、接頭辞的になった「トリ」がどのような機能を有するのかについては、今回は触れることができなかった。②の「トリ付く」「トリとどこほる」「トリ続く」はそれぞれ「しがみつ

²⁰ 典型的な接頭辞は、現代語における「お茶」の「お」や「か弱い」の「か」のように、単独では語として使用できず常に他の語に上接して機能するものである。これに対し、「トリ」などの接頭辞的な動詞連用形は、その機能こそ接頭辞と類似しているが、共時的にも単独で語（他動詞「トル」）として使用でき、むしろそちらの用法が主である点において、典型的な接頭辞と特徴を異にする。そのため、筆者はこれらを同じレベルの接頭辞と位置づけることに疑問を抱いている。本稿では「接頭辞的な前項」と呼んでおくが、「接頭辞」とは異なる扱い方が必要となるかもしれない。

く」「ぴったり続く」のように解釈されることから、前項「トリ」が「距離が近く、密接している」あるいは「手でつかめるほどに近い」「手で掴むようにしっかりと」などのニュアンスを表している可能性があるが、定かではない。いずれにしても、内省の利かない上代語ゆえ、その意味を正確に記述することは容易なことでない。主観的な解釈に依拠しない慎重な考察が必要である。

前項が接頭辞とされる動詞接続には、「トリー」のほか「ウチ（打ち）ー」「カキ（掻き）ー」などがある。これらは、「堅塩を トリつづしろひ 糟湯酒 ウチするひて」(46)、「天皇我れうづの御手もち カキ撫でぞ ねぎたまふ ウチ撫でぞ ねぎたまふ」(『万葉集』巻6 ○九七三)のように連続して使用される場合があることから、何らかの関連があるものと推測される。これらがすべて接頭辞的な要素であるとするれば、上代語において、前項が接頭辞的である複合動詞が体系的に成立していたということになる。これらの形式についても、「トリー」と同様に調査を行いたい。

参考文献

- 石井正彦 (2007) 『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房
- 伊藤博 (1995-1998) 『万葉集釋注 一～十』集英社
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 金田一春彦 (1953) 「国語アクセント史の研究が何に役立つか」『金田一博士古稀記念 言語民俗論叢』三省堂
- 古典索引刊行会編 (2003) 『萬葉集索引』塙書房
- こまつひでお (1975) 「音便機能考」『国語学』101 国語学会
- 斎藤倫明 (1984) 「複合動詞構成要素の意味 — 単独用法との比較を通して—」『国語語彙史の研究 五』国語語彙史研究会 和泉書院
- 斎藤倫明 (1992) 『現代日本語の語構成論的研究 一語における形と意味—』ひつじ書房
- 山王丸有紀 (2009) 「上代複合動詞の結合事情についての一考察」『国語語彙史の研究 二十八』国語語彙史研究会 和泉書院
- 上代語辞典編修委員会編 (1967) 『時代別国語大辞典 上代編』三省堂
- 関一雄 (1977) 『国語複合動詞の研究』笠間書院
- 徳本文 (2009) 「上代の複合動詞 — 前項と後項の意味関係から—」『立教大学日本文学』102 立教大学日本文学会
- 飛田良文編 (2007) 『日本語学研究事典』明治書院
- 百留康晴 (2001a) 「動詞接続から複合動詞へ — 「一入る」の補助動詞化を中心に—」『文芸研究』152 日本文芸研究会
- 百留康晴 (2001b) 「継続を表わす補助動詞「一統ける」の成立」『言語科学論集』5 東北大学大学院文学研究科
- 百留康晴 (2003) 「複合動詞と動詞接続 — 「～出づ」を中心に—」『国語と国文学』80(8) 東京大学国語国文学会
- 正宗教夫編 (1974) 『萬葉集總索引 單語篇』平凡社
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 吉澤典男 (1952) 「複合動詞について」『日本文学論究』10 国学院大学国文学会